

⑮ オオハンゴンソウ

オオハンゴンソウ (*Rudbeckia laciniata* Linn.) キク科 原産地：北アメリカ

導入経緯：日本には園芸植物として明治時代に導入された。その後、河辺や草原・荒地などに広がり、北海道から本州の中部以北の地域を中心に広く生育している。

生態：河辺、草原、荒地などに生育する。草丈が2m以上になり、種子とともに地下茎で繁殖する多年草である。

【調査結果概要】

文献調査によると 11 市町村で確認記録がある。本種は繁殖力が旺盛であり、急速な分布の拡大が懸念される。

また、希少な野生動植物が多い裏磐梯の自然公園内でも生育が確認されており、生態系への影響が懸念される。花期が 10 月頃までであることから、今回のアンケート調査においても生育情報が多数寄せられており、県内のほぼ全域において確認されている状況である。

なお、県内では裏磐梯地区パークボランティアによる除去作業が 5 年以上前より実施されていることが、アンケートにより報告されている。

全国での取り組み事例としては、栃木県日光国立公園の奥日光地域で、昭和 51 年より継続的に対策が実施されている。戦場ヶ原ではオオハンゴンソウが一掃されるなど一定の効果は認められている一方、中禅寺湖や湯ノ湖の周辺地域へと生育範囲が拡大していることが確認されており、除去活動は収束していない。



オオハンゴンソウ

(福島県野生動植物保護サポーター 須賀 紀一氏 撮影)

